



大智祖繼禪師

大智祖繼(だいちそけい) 【二二九〇～一三六六】

曹洞宗。肥後(熊本県)宇土郡(現熊本県宇城市不知火町)の生まれ。七歳で大慈寺の寒巖義尹(なんがんぎいん)について剃髪し、小智と名付けられたが、大智と改めてもらう。南蒲紹明(なんぽしやうめい)、釈運などに参じた後、加賀大乘寺の瑩山紹瑾(けいざんしやうきん)の門に移り、本来の仏經の奥義に接す。二十四歳で渡海し、古林清茂、雲外雲岫(うんがいうんしやう)などを歴参、帰国後明峰素哲(めいほうそてつ)の法詞となる。以後加賀吉野郷に祇陀寺(ぎだてじ)を創建し、晩年は肥後鳳儀山聖護寺(ほうぎざんせいごじ)、水月山円通寺に転住した。

大智祖繼

人山を見 山人を見る

機鋒

T O U G E N N E W S

7 月 1 日 (金)

発行所 桃源院
発行責任 桃源院 広報部
〒191-0065 日野市旭が丘3-1-4
編集 村上明宏 田中文高
桃源院アドレス tougen@momo.or.jp

七歳のとき肥後国の大慈寺に入り、道元禪師の弟子、寒巖義尹禪師について出家しました。

2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841

もうすぞ」

「はい、萬仲と申します」

「ほう、萬仲が饅頭を食う、これは面白いことじゃのう」

「それは、あの、大蛇が小蛇を呑むようなものです」

少年の唐突でまた利発な答えに寒巖禪師は感じ入ってついほほえんだそうです。

また大智という名
に關して、次のよう
な伝説が伝わって
います。

寒巖禪師は川（大慈寺の傍を流れる緑川）を指差して言い

ました。



大慈寺

大慈寺

ました。

「この川はどうも川舟の往来が激しく騒がしい、この場で舟の往来を止めてみなさい」

萬仲はすつくと立ち上がり、川を望む側の障子を閉めて、座に戻って言い出した。

「これで舟はとまりました」



宇治 興聖寺



春秋のお彼岸、夏のお盆の後、枯れた供花やお水・お茶をかたづけています。遠方のみなさまには大変好評です。（本院墓地・金谷別院墓地）

本院・別院春もよう





鳳儀山 聖護寺



後村上天皇



紫陽山 広福寺



水月庵 円通寺

大智は古仏なり、古仏にしてまた古仏なり。古仏の中の古仏というのであって、これにまさる尊敬の言葉はありません。祇陀寺に約十年間在住後、「故郷忘じがたくして、瓢然と生国肥後に還る」と、加賀の祇陀寺より肥後国に帰ります。しかし、沢木興道老師の夜話によれば「そんなことがある筈はない」。出家して禅の奥義を極めた古仏に、単に故郷忘れたがたく、というよ

うな理由はありません。故郷に帰ってみたい。菊池武時が現れたら、大智に帰依したと信じられているように、うですが、恐らくそうです。武時が大智を慕って、切に請うて肥後に招いたにちがいないところだと言います。とにかく出生国肥後に帰って、菊池郡穴郷に鳳儀山聖護寺に住持して、永平の禅風を九州の地に広めたのです。このときの大檀家

が菊池武時であり、武時は大智を慕い、全生命を打ち込んで大智に参禅したので、後の世に、大名などが時に禅者を訪ねて教えを受けたなどという話とは全く異次元の信仰なので、師とその弟子の礼をとって参禅し、弁道し、師事したので、菊池の一門も多くの者が参禅したようです。この一筋の永平の禅風が吹いていたのです。こうして南朝の忠臣、菊池一族は、大智への参禅によって魂の成長を成し遂げたのでした。

大智はこの鳳儀山に入り二十年、ただ仏祖の道を護持してひたすらに坐禅弁道し、一個半個の打出に、(多くの弟子を育てること)に励んだのです。武時の長男、武重も大智に師事しました。後村上天皇の正平六年(一二三六)年、武重は玉名郡石貫郷に紫陽山広福寺を建立して、大智を拝請して開山しました。武時が出家して寂阿と名を改めたよう

願わくは、我れ此の父母所生の身を以て、三宝の願海に回向し、一動せず、今身より仏生に於て、死、生を離れず、衆生を渡して、或は劍樹湯

大智禅師発願文

この願文で継承された大意は、永平道元のまた大智の悲願であるといつてよいのです。極めて格調高く美しい文章です。この願文から湧きいづる悲願が、人々を教化し、果ては愚直なまで忠義を尽くす、菊池一族の魂のもとになったと思われる。

尚、『大智禅師発願文』が残されているが、これは実際には寒巖の書いたもので、これが大智の法語に収録されたもので、大智の名で呼ばれることになったものです。この願文で継承された大意は、永平道元のまた大智の悲願であるといつてよいのです。極めて格調高く美しい文章です。この願文から湧きいづる悲願が、人々を教化し、果ては愚直なまで忠義を尽くす、菊池一族の魂のもとになったと思われる。

志を継ぐということを述べたもので、永平道元のいわゆる「嫡々相承」がここに生きているのです。為君とは当然朝廷の為です。菊池一族が四百五十年にわたって志を変えなかったのは、先に掲げた「発願文」にあったように、「生々世々、出生入死」の悲願によって永く醸造されたものなので、本来、仏法は世法

万像之中独露身

左記の偈は、大智禅師が聖護寺に山居された頃の作です。禅師はここに二十年間も住まわれまして、四十七、八歳から六十七、八歳頃まで、この山居中の作が八篇あり、ここに引用するものはそのうちの代表作です。

一、舎兄肥後守子孫々まで、いましめを定置れ候て、正法護持之志は誠にましまし候。信の心を発して、子孫々まで、に正法を守護し奉る。来正法を護持し奉る。

もちろん、大智禅師は世法としての歴史の世界にはいなかった人です。道元禅師と同一ように一世の紅塵飛んで至らず、深山雪夜草庵の中、とある通り、世外の人でありました。世外の大智禅師が史上最高の忠節の鑑、菊池一族をつくりあげたのです。

あるべき日と定められ、特に生あるものを殺さないという誓いです。「ながく禁断せしむべく候」の「ながく」とは生涯の意思を持った言葉で、強い決意の程がうかがえます。

とは全く違うものだ、というのが道元以来の曹洞宗門の宗旨でありました。ただ、この世法に非ざる仏法が「弓箭の家」に入って、国体の守護並びに志の継承という面で、想像も及ばないほどの働きを実現しました。これは見逃すことが出来ない歴史上の事実なのです。



更於何処著根塵、回首独倚枯藤立。人見山兮山見人、万像之中独露身。更に何れの処に於て、万像の中独露身。人見山兮山見人、万像之中独露身。人見山兮山見人、万像之中独露身。

また有り。だからこそ山と人とのこの感応道交があるのだ。われ語れば山応え、山語ればわれ応える。いまの世の人が「自然」と呼んでいるものは、自分の向う側に横たわる客観世界です。人が山を見、人が山に登り、人が山を測量する。人が山を測る。人が山を測る。人が山を測る。